

東日本大震災から7年の時を経て、『被災地は活気を取り戻し、復興に向かいつつある』とメディアは伝える。しかし福島は、第一原子力発電所の爆発事故、放射線物質の拡散による被害に苦しみ続けている。福島へ行き現状を確かめたいという思いで、12月26日～30日に柴田神父様や山口教会の方々と被災地ボランティアに参加した。

主な仕事は、放射線被害への不安から園庭や校庭で遊ぶことが制限されている子どもたちの学童保育の手伝いだった。室内に設置された砂場やジャングルジム。教室内で楽しそうに長縄をする子どもたち。青空の下、思いっきり駆け回るのが本来の子どもの姿なのに、と私は複雑な気持ちになった。

4日目の視察では、防災センターを皮切りに被害の大きかった浜通りを南下した。報道された被害場所が次から次へと迫ってくる。第一原発に近い双葉町や大熊町にさしかかると、手にした放射能測定器の数値が急激に上がり始め、緊張感が高まる。居住制限区域はもちろん、避難指示解除区域に入っても、目につくのは崩れたままの住宅、人気のない町で点滅を続ける信号機。帰還困難地域入口に設置されたバリケード、随所に置かれた放射線量を測るモニタリングポスト、野ざらしのフレコンバッグ。荒廃した異物だらけの町が虚しく広がり続ける。これが復興から取り残された福島の姿である。

自分のふるさとに帰りたくても帰れなくなった現代の難民たちは、この豊かな日本社会の中に現実に存在している。「この国は本当にこれで良いのか？」と憤りを感じた。

考えさせられたのは、被災地支援が第2の段階を迎えているということだ。仮設住宅を離れ、新しい土地で暮らし始めた人も多い。この7年、不便を感じつつも助け合いながら生活を支え合ってきた人々が、また離ればなれになっていく時期が来たのだ。新しい人間関係作りや環境への適応は、高齢者にとっては実に厳しく、ストレスの原因となる。被災者へ対するきめ細かな心のケア、健康状態の確認など、これからはソフト面での援助がさらに必要になるだろう。このニーズに応えていくことが、教会の役割かもしれない。

被災地に笑顔を取り戻すために、苦しみの中から見えてきた光を応援していくために、私たちは福島の人々の真の隣人となり生きていくべきではないだろうか？

貴重な体験をさせてくださった教会の皆様に感謝しつつ、考えたことを綴ってみた。

「2017 冬季東北ボランティア 福島・南相馬」を終えて

山口教会 瀬川憲昭

今回で5回目の福島訪問になります。あの震災から、間もなく7年が経とうとしています。見えない放射能という相手と悪戦苦闘しながらも、少しずつ環境は変化していることを体感しました。ただ、行政側の対応と地元側の意見・希望が食い合わない事を聞いたりすると、先へ不安がまだまだあり、安心して暮らせる日がいつやって来るのか見通しが立たないように感じました。

到着初日は5名のボランティアを快く迎え入れて下さった桑折教会信者の氏家さん宅に宿泊させて頂きました。昨年、初めてご厄介になり今年もおいしい栄養たっぷりのお食事と暖かい御布団に只々感謝、感謝です。福島駅から氏家さんの御宅に向かう途中、最先端のカーナビも何故かうまく働かず、小雪がちらつく中、氏家さん直々お出迎え、案内をして頂く羽目になり大変ご迷惑をおかけしました。

2日目“星の子クラブ”での学童保育のお手伝いではこの前の春休み、昨年末の訪問時に会った

子も何人かいて、聞いたらみんな覚えて居てくれたのが、嬉しかった。子供たちは1年の間に本当に大きくたくましく成長していました。こちらから用意をした様々な工作材料、カルタ・・・そして2頭の恐竜の出現で教室は大パニックに。狭い教室を怖がって逃げ惑う子ども達の姿に柴田神父と、ミントアンさんは着ぐるみの中でニンマリだったのでは・・・？ 限られた時間でしたが楽しいひと時になりました。自分もカルタの読み手を何十年振りにやって、子供の頃を思い出させてもらった。

翌日は場所を南相馬に変え、カリタス南相馬ベース横の原町さゆり幼稚園での預かり保育の活動でした。園児たちは元気よく、活発で素直でお祈りをしたり、遊んだり、食べたり、昼寝をしたりしていました。移転前の旧ベースを初めて訪問した際、説明役のシスターが、「さゆり幼稚園への入園希望者が原発事故の影響でこれから先はますます少なくなっていくでしょう」と言われてました。「これからどうすれば園児が来てくれるのか悩みの種です」と云われた事を思い出しました。ところが、今回伺った時に聞いたら「今年は90人を超えました」とのお返事。これを聞いて、本当に良かった。シスター方や先生方のいろいろなご苦勞が実った結果だと思いました。

活動最終日は津波の被災地・福島第一原発沿線の訪問でした。これまでの感想文にも何回か書いたと思いますが、福島市から南相馬に至る道路沿いには、各地で除染の為に掘り返された土を入れたフレコンバッグが積まれています。3年前は山間の目立たない所に隠す様に置かれていたが、年が経つにつれ置き場は各所に増え続け、囲いは広く高くなっていました。当初は囲いの内部に積まれているフレコンバッグは見えない程度で隠れていましたが、今では囲いの高さが追い付かない程の高さ迄積み上げられていました。「どうやってこれだけのフレコンバッグを処理をしていくのだろうか？」という単純素朴な疑問が生まれます。フレコンバッグの多さは、逆に考えればこれだけ除染しましたと云う一つの証にはなるでしょう。しかし、いくら破れない、漏れないシートとは云え、何年も屋外で雨ざらしになれば、いつかどこからか穴が開き、そこから雨水が伝って来て折角回収した汚染物質が漏れ始め、地中に凍みこむ事態も考えられます。フレコンバッグの山は、除染は一応やったという証ではあっても、ただの気休めの状況ではないか？ という疑問も湧きます。国は廃棄先の用地確保に動いているが、本来なら完了していなければ遅いと思う。フレコンバッグが破れるのが早いのか？ これだけの数量を埋める用地確保が早いのか？ こんな厄介な代物を「どうぞどうぞ私の土地に御埋め下さい」という地主さんなどおられないでしょうに。いずれにしても、今迄に経験したことのない汚染物質、これだけの量を一体どう処理するのか？ 深刻な問題です。

ここ1~2年の間で部分的に鉄道が開通し、道路や建物も新しくなり、開業する店も増え、避難解除されてたことは喜ばしい状態です。拡散している放射能の線量も一時期よりは下がっている様です。しかし、福島第一原発周辺はまだまだ線量が高い状況です。復興住宅の完成に伴い、仮設住宅は徐々に集約・撤去され転居される方もおられる様です。しかし、まだ移転先が決まらない方もたくさんおられます。

避難解除の不合理も目の当たりにしました。一部地域は道を挟んで左側が避難が解除されて住宅会社が誇らしげに看板を掲げ、個人住宅を新築中でした。一方右側は依然として敷地侵入禁止のバリケードが張り巡らされた帰還困難区域に指定されていました。何を基準にしてこんな差が出来ているのか理解に苦しみます。行政のすることには矛盾、理解しがたい事が沢山あります。

富岡町周辺では、今迄田畑であったであろう場所が、ソーラー畑になっていました。こんな光景は珍しく、田畑では使用できない事への有効利用と思います。どの位の発電量が得られるか、知りたいです。

断片的に色々書きましたが、一番の問題は、これだけ大きな損害を与えたにも関わらず、その原

因は究明されないまま原発が再稼働されていることです。“安全基準”という言葉がありますが、原発事故がもう絶対に起きない安全を保証するものではなく、再稼働を認める基準でしかないように思えて納得できません。

私達のボランティア活動は本当に微々たるものです。しかし、被災した現場を自分の目で見て確認することは、人に伝える強みになります。今まで撮りためた写真や動画を出来るだけ多くの人に見せ、語り続ける事が大切な役目と思っています。

この春で、2011年以來、春休みと夏休みに活動していたカリタス大槌ベースが閉鎖されることになりました。これからの活動をこの南相馬のベースに移すようになるかもしれません。幸いにしてカリタス南相馬ベースは、築2年で、設備も整い、隣には教会も幼稚園もあります。これらの立地条件を生かして有意義なボランティア活動ができれば、と考えています。

「2017冬季東北ボランティア 福島」 山口教会 瀬川由生子

私は、今回はじめて信者の氏家さんのお宅に宿泊させて頂きました。何もかもが、至れり尽くせりで、初日の夜、ゆっくり休むことができました。

翌日は、大雪で市内に出るまで少し時間は掛かりましたが無事、桜の聖母学園に到着。学童保育「星の子クラブ」には子供たちが大勢来ていました。持参した何種類かの紙工作の中から、各自が好きな物を選んで作り始めました。小学生のみんなが、集中して楽しみながら一生懸命製作し、完成させ、できたものを比べ合っていました。氏家さん宅に行く途中に買ったカルタは大好評でした。昼食を共にしながら話が弾む。顔なじみの子ども達ですが、今年の3月には卒業し中学生になるのもう会えなくなるかも……。そんな寂しさもあり、喜びでもあり……。でも成長が嬉しい。また、みんなのお祈りも随分上手になっているのを感じました。

原町のさゆり幼稚園のこどもたちは、以前は落ち着きがないように感じましたが、今回行った時には話もちゃんと聞き、仲良く話し合いながら遊んでいて、だいぶ落ち着いてきているように感じました。

最終日の被災地視察では、これまで至るところに山積にされていた黒いトン袋（フレコンバッグ）が、集積されて、高い山と化し、それらは白い塀で囲まれていました。トン袋はさらに隠すようにシートで覆われています。その異様な光景に不安を増すのは私だけだろうか？ 畑や、田んぼはソーラーパネル畑、ソーラーパネル田んぼとなって次から次へと増設されていく。異様な光景に見える。これで良いのだろうか？ と感じながら視察を終えました。

2017年冬休み 福島ボランティア体験記 徳山教会 柴田 潔 神父

12月26日 移動日

昨年末に引き続き、氏家さんのお宅で宿泊と食事をお世話になりました。個人のお宅に宿泊させて頂いていただくのは非常に珍しいので、余計に氏家さんとシスター熱海さんの心のこもったおもてなしを嬉しく感じました。息子さんの追悼ミサもさせて頂きました。

12月27日 学童サークル“星の子クラブ”での活動

子供たちとどのように遊んだらいいか？ 出発前に色々考えて用意はしましたが、どれも決め手がない状態でした。福島に向かう新幹線の中で、「色々なカルタを準備したら楽しんでもらえるの

では？」と思いつき、氏家さんのお宅に向かう途中、お店に寄って展示してある全種類を買いました。

その日は、午前中はティラノサウルスが二頭登場したのち、紙貯金箱・ストラップ・ヘレクレス大カブトムシの立体折り紙などを作りました。午後は、グループに分かれてカルタ大会をして盛り上がりました。年があけて1月16日には、学童サークル“星の子クラブ”の児童たちからお礼のお手紙をもらいました。正月になってもカルタ取りを楽しんでもらえて嬉しかったです。急な思いつきでしたが、カルタをプレゼントできてよかったです。再会した子供たちは、ひとまわり大きくなってたくましさも感じました。短い時間でしたが、共に楽しめてよかったです。

12月28日 原町さゆり幼稚園での活動

春にさゆり幼稚園に訪問した際に、小さき花幼稚園から献金を持参しました。園児が増えたことで園舎が増築されていましたが、献金はその資金に当てられていました。

園児さんは、春に来た時よりだいぶ落ち着いていました。乱暴な言葉も減っていて先生たちのご苦労が実っていることを感じました。春休みの時と同じようにティラノサウルスの恐竜で登場しましたが、今回はその後、恐竜図鑑を広げて調べていました。ただ遊ぶのではなく、知的に追求する態度が見られました。また、“おぼけハンカチーフ”という手品をしたら「おぼけなんてないさ」の歌を歌って、遊びの続きを自分たちでして成長が伺えました。

私は日頃、周南市の2つの園長として子供たちと関わっています。「この子には、どのような声掛けをしたらいいのか？」と考えるようになってきました。さゆり幼稚園でも、お友だちの仲間に入れない子にどう関わったらいいか？ 考えてました。私が積み木をしているところを見せると、その子も積み始めました。すると、積み木を背の高さ以上に積もうと夢中になりました。落ち着きや集中力がないように見える子でも、やりたいことが見つかったら変わる、ということがわかりました。私の中に、保育者としてのアイデンティティーが育っていることを感じました。子どもたちの集中力を養う、いい遊具がないか？ これから探していこうと思います。

さゆり幼稚園は、来年度から単園での学校法人経営になるそうです。カリタス南相馬ベースの協力を得ながら新しい一步を踏み出します。子どもたちの将来のために何ができるか？ 考えていきます。

平日の祈りミサと大切さの発見

徳山教会では、平日のミサに与る方は見られませんが、原町教会の平日のミサはたくさんの方が熱心に祈られています。私の拙い説教でも、内容を1日中、心にめぐらしながら過ごされたシスターもいらして、平日のミサの大切さを感じました。また、ミサの前の“教会の祈り”も心に残りました。1日の働きを神様に向けて共同体で祈る姿は特別な力になります。特に“東日本大震災被災者のための祈り”をこれほど力強く感じたのは初めてでした。こちらに戻ってからも、あの時の朝の祈りとミサの雰囲気を出しながらかつて祈りとミサをお捧げしています。

12月29日 視察で感じたこと

私は、9月にも南相馬を訪れて状況は聞いていたので、他の人よりも印象が弱かったかもしれませんが。慣れてくることに気をつけないといけないと思います。一番印象的だったのは、道を挟んで片方は帰還困難区域で、もう片方は住んでもいいとみなされていることです。その線引きに科学的な根拠はなく、原発事故の賠償金の支払いを減らしたいために引かれたのでしょう。現地を訪れた

人は、3000 万個と言われる汚染土を入れたフレコンバックを目の当たりして「どうなってるの？」
「これはおかしんじゃない？」という疑問や怒りを持つでしょう。でも、人の関心はどんどん薄れ
ています。「これでいいのか？」と不安や恐れを感じます。だから私に「何ができるのか？」とい
うと大したこともできません。でも無関心に抵抗し続けなければなりません。

12月30日 移動中の霊的な糧

移動中の新幹線で『あなたがたは祈るとき』（カルロ・マリア・マルティニ著）という本を読ん
でました。この本は、新しい年の霊的な糧になりそう、と感じ、年が明け要約をしました。毎日の
黙想の材料にしています。日頃幼稚園と教会で忙しくしているので、霊的読書の時間が作れたこ
もボランティアで得られた1つの賜物でした。

福島のこと

2018年1月17日に「NHKスペシャル 遺児たちのいま 阪神・淡路大震災から23年」という番
組が放送されていました。震災で親と家族を失った人たちが、親になってきています。ある女性は
出産の時「パパ、ママに会いたい」と泣き叫んでいました。生きるより、天国で待っている両親に
会いたい気持ちが強いそうです。23年経っても、自分が親になっても、親や家族を失った悲しみ
は心の中に強く残り続けています。津波で家族を亡くされた方、原発事故で故郷を奪われた方たち
のその後の歩みはどうなるのでしょうか？ 考えさせられます。東日本大震災からもうすぐ7年です。
「復興」という言葉をよく耳にします。でも、防潮堤を建てたり、避難解除をしたら被災者の心か
ら悲しみ・悔しさがなくなる訳ではありません。悲しみを胸に残しながら、毎日現実に向き合っ
ておられます。その方たちを遠くからですが見守り、応援していきたいです。小さなことしかでき
ないでしょうけれど、神様はその小さなことに永遠の価値を与えてくださいますから。

最後に年明けに届いた学童サークル “星の子クラブ” の先生からのお便りの一部をご紹介します。

皆さまの優しい笑顔と子供たちの輝き、喜ぶ笑顔に再び心暖まる思いです。今春3月には、あの災
害から7年目となりますが、今なお、正しい裁きも下されない中、苦しみの中に多くの方がありま
す。その一人一人を覚えてお祈りし続けてくださることに心よりお礼申し上げます。

ミントアン イエズス会神学生 長崎26聖人記念館 2017年1月2日

ベトナム出身の私にとって、この時期の東北地方の福島はとても寒く、大変なこ
とは前からわかっていましたが、ぜひ行きたいと思いました。さらに、福島の人々に
ふれあい、その環境の中で過ごしたいと思いました。それは幼子殉教者との出会い
のようです。

ボランティア 3 日間のうち 2 日間は子供たちに出会い、遊んだりしました。子供たちの世界は豊かで案外楽しい世界だと思いました。さらに、子供たちの純真さ、英明さに触れ合うこともできました。

「神の国はこのような者たち（子どもたち）のものである。」

(マルコ10：14) 心から喜ぶ

福島の見察は今回で3 度目になります。前回は訪問した富岡や浪江などを視察に参りました。その地で静かに過ごす人々の自然が回復でき、大震災の影響を克服しつつあるように感じました。わたしはいつか福島の環境が完全に復興し、その地を離れた人々が故郷に戻り生活するという希望を持っています。

平成 30 年 1 月 10 日

—福島・南相馬とカリタス原町ベースを訪問して—

コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会
熱海 紀子

ホームステイさせていただく友人の家は飯坂電車の最寄りの駅から車で、15 分ほどでした。広島教区山口ブロックから参加される 5 名の皆様をそこでお待ちすることにいたしました。ここ数日、福島には珍しく大雪でした。寛大にお住まいを提供して下さった友人の家は 6 名が泊まれるように暖かく整えられていました。

広島教区山口ブロックの皆様との出会いは、2013 年の「ふっこうのかけはし」に、福島市にある二つのカトリック教会（松木町教会と野田町教会）の教会学校の子どもたちを招待いただいたときにはじまりました。今振り返ると、参加させていただいた子どもはもちろんの事、親御さんも引率のつもりの私も（本当は必要なかったと思いますが）言葉に尽くせないほどの豊かな恵みを頂きました。（そのことはいつかどこかで感謝をこめてお伝えできればと思っています）その後 2014 年と 2015 年と続けてくださったのです。

福島（26日）に着いているはずの山口からのボランティアの方々の到着があまり遅いので携帯電話で連絡を取りながら、友人は迎えに出ました。星の子クラブの子どもたちのために「かるた」の買いものをしたときからナビが方向を示さなくなってしまったのだそうです。

懐かしい方々 柴田潔神父様、瀬川憲明様、瀬川由生子様、山本綾子様、グエン・ミン・トアン神学生が揃い、すぐに柴田神父様は家庭ミサを捧げてくださいました。昨年と同じ時期のボランティアでのミサから頂いた大きなお恵みを忘れることができません。

お恵みの続きは友人の素晴らしいお料理の夕食でした。献立は、ブリの照り焼き、ひじきの煮物、白和え、煮物、ポテトサラダ、ミニトマトのピクルスのお重詰めにわかめご飯と味噌汁でした。和やかな雰囲気でお友人のもてなしの味を堪能しました。

翌日（27日）、学童センター星の子クラブの（桜の聖母学院小学校の校舎の一部に併設）訪問を楽しみに待っていてくれた子どもさんたちはお行儀よく出迎えてくれました。ボランティアの恐竜での登場に子どもさんたちは大喜びでした。中に入っているのは誰だろう・・・と、知りたくてたまりませんでした。

夢中で取り組んだ工作・・・。昼食の後は、お楽しみのカルタ大会でした。カルタに夢中でした。グループに分かれると役割分担をはじめ、そのうちルールの必要が出てくるとお手つきの場合は・・・、最後の数枚になったら手を頭に載せておくなど・・・。なかなかカルタを取れずに、悲しくなっていた下級生の男の子に上級生が、気持ちの持ち方やとり方のコツを教えていました。とても微笑ましい姿でした。同じカルタを「もっとやりたい・・・」と何回も繰り返したグループもありました。「かるた」のお土産に大喜びでした。

2011年以前なら雪合戦や雪だるまつくりにも興じることができたでしょう。しかし、原発の事故（放射能）は、子どもたちから雪遊びを取り上げてしまいました。

山口からの5名様は南相馬行き的高速バスのつもりで乗ったバスは、途中、福島医科大学附属病院経由の路線バスになっていましたから、途轍もなく時間が懸かったそうです。これは政府からの要請とのことで、浜通りの住民の健康や、原子力発電所の従業員の健康管理を考えての事ではない

かと思えます。

28日、福島から合流した氏家重子さんと熱海紀子は早朝、東北アクセスのバスでカリタス南相馬ベースに向かいました。凍っている道路を心配しながらも、車窓から見える雪景色は風情がありました。しかし飯館村を過ぎるところから、高さが10mにも及ぶフレコンバックの山が続き、昨年より山が高く感じられました。各地の避難解除にも関わらず、原発事故・震災による復興の遅れに気持ちが重く沈みがちでした。自分たちのできることの限界を知ると同時に、いや、今行っていることを続けようと、気持ちを奮い立たせました。

カリタス南相馬ベースでは早速「まごころカフェ」に参加させていただきました。かわいい草履のアクセサリ作りでした。手芸の感覚の豊かな氏家さんはすぐに手が動きだしました。傍で見ていただけの私でも、いっしょに作業しているような気持ちになり親しい雰囲気生まれて温かな気持ちになっていました。

午後は、いよいよ夕食のお料理をさせていただくことになり、二人は、少しは役に立てればと、元気がでてくるのでした。

夕方5時30分から全員が集まって行う分かち合いでは、多少の緊張があっても初めての宿泊者である私たちを丁寧に受け入れてくださいました。

翌日(29日)は同じ敷地内のカトリック原町教会の聖堂で早朝6時45分から教会の祈り、そして引き続き柴田神父様がミサを捧げてくださいました。ベースに関わっている信徒の方々や修道者、山口からのボランティアの方々に聖堂はほぼ満たされていました。

私は静かな喜びに浸っていました。この小さな教会でのミサの祈りは、世界の教会の祈りだという実感でした。(十分に表現できませんが・・・)この祈りが「証し」になっている、そしてこの祈りが活動を生み出しているという実感でした。カリタス南相馬ベースは、福島県浜通りのカトリックの「要」としての役割を、その使命を静に果たしておられることへの感動でした。

朝食後、ベースの山田さんの運転で、檜葉、富岡、大隈、双葉、浪江、小高と案内してくださいました。かつては宅地であったり、田畑であったり、また浜辺であった広大な土地がこれからどのように活用されるのでしょうか。

思い出されるのは、数年前に、ある仮設住宅にお住いの漁師さんが話してくださった話です。「地震が来たとき津波から漁船を守るために直ぐに沖に乗出したんだよ。一昼夜過ぎて戻ってくると家内が津波に流されて変わり果てた姿になっていたんだ」「漁船は作れるが家内の命は戻らない」と目を潤ませて語ってくださいました。

私たちの乗った車がある角を曲がると「希望の牧場」の看板が目に入りました。そこに放牧されていたのはかなりの数の黒和牛で、被曝しているため殺処分するはずの牛だったのです。不憫に思った牧場主が餌を与え、自然死を待つだけの日々を過ごさせているのだそうです。

かつて私は東京電力が福島県に原子力発電所を建てたことにも、修道女連盟の原子力発電所の体験学習にも関心がありませんでした。東日本大震災によって東京電力福島第一原子力発電所の事故がこのように大きな災害を引き起こすとは想像できませんでした。無関心という罪悪感と、安全神話を鵜呑みにしていた自分の愚かさに打ちのめされました。

昨年に比べてフレコンバックが見上げるほどに積みあげられ山が高くなっていました。一方では太陽光発電パネルの広がりや風力発電装置が増えていたことです。原子力発電ではなく再生可能エネルギーの活用に復興の動きが感じられ、単純に喜びが込み上げてきました。

「傾聴ボランティアさくら」の今年の活動が間もなく始まります。傾聴を通して私たちがどんなに変えられてきたかを忘れず、必要とされる場所で気負わずに、ゆっくり、さらに、神様から頂いたひとりひとりの「いのち」を真心こめて、大切にに関わり、祈り続けたいと思います。

カリタス南相馬ベースが「祈りと奉仕」を通して、大きな証しになっているように、私たちもそこから学び続けたいと思います。 祈りと感謝のうちに。

あとがき

広島教区山口地区の柴田 潔神父様、瀬川憲明様、瀬川由生子様、山本綾子様、長崎からのグエン・ミン・トアン神学生の皆様、福島からの氏家重子さんと熱海紀子の二人をボランティアに加えていただき、心から感謝申し上げます。

ホームステイさせていただきました私たちの大切な友人に心からの御礼を申し上げます
この友人は「当然のことを行っただけのことです」と言っています。当然のことをするのがどんなに大変であるかにもかかわらず・・・。

カリタス南相馬ベースのスタッフの皆様 私たちを丁寧に受け入れていただきとてもありがたく感謝申し上げます。被災地訪問にお連れ下さった山田様ありがとうございました。

ベースのあの温かな雰囲気はどこから・・・どのように・・・そうです。分かりました。一番の根っこはあの朝の祈りとミサからの恵みですね。

心からの感謝のうちに。

コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会
カトリック松木町教会所属
傾聴ボランティアさくら
熱海 紀子

2018年1月15日

—南相馬ボランティアに参加—

カトリック桑折教会所属
氏家 重子

山口ボランティア活動に参加させて頂き有り難うございました。

私は福島と宮城の県境に近い中通りに住んでいます。

原発被災地の状況は報道を通して知ることは出来ますが、現状を間近に知ることは、なかなか難しいことです。

この原発事故による被災地の現状を知り何かお役に立てないかと思い、参加させて頂きました。昨年の夏は、山口の皆さんは、猛暑の中大変な作業をなされたとお聞きし胸がいたみしました。地元に住んでいても積極的なボランティア活動も出来ず心苦しく思います。

12月29日、ベースの方の案内で檜葉、富岡、大熊、双葉、浪江、小高と廻って参りましたが、これだけの広い地域を人の住むことの出来ない地に変えてしまった原発事故の恐怖と人災とも言える人間の知識の限界を改めて感じさせられました。

視察の途中、南相馬市消防・防災センターを案内していただきました。そこには地震発生直後から数日間の避難者の方々の様子が写真に写っておりました。私はそれらの写真を見て、身近なところでこんな事が起きていたんだと思い思わず目頭が熱くなりました。

そして津波の高さが10mにも及んだという印もあり想像に絶するものでした。

次に案内されたのは牧場でした。広大な牧場に何十頭という牛が放牧されておりました。この牛たちは本来なら殺処分されなければならない牛たちです。しかし牧場管理者の一人が、どうしてもそれに耐えられず、警察の監視を避けて、餌を与え続けて現在に至っています。しかしその牛たちの将来は自然死を待つだけの日々をあの広大な牧場でゆったりと過ごしています。

そこから福島第一原発の方へ進んで行くと、かつては実り豊かな田園だったところに、フレコンバックの山が至るところに積み上げられております。人の行き来のあるところは10mもある程の高い塀に囲まれその量も一昨年末にくらべて何倍にもなっておりました。あの危険な大量の物体は今後どのように処理されるのかと想像しただけで背筋が寒くなる思いでした。

かつては自然豊かな町や村に住んでいた人々は二度と戻ってくる事の出来ない故郷を後にして、子を育て、年老いた親と離れ、どんな思いで日々の生活を送っているのでしょうか？

そして帰還困難区域では道路をはさんで右と左で帰還可能、不可能となっています。表示されている数字には大差はないのに何を基準に区別されているのか、私には理解できませんでした。

帰還困難区域では地震直前まで生活していたであろうそのままの状態が残されています。そこから動かすことが出来ないのです。

帰りぎわに桜井勝延市長の講演時の印刷物を頂き、読ませて頂きましたが、地震と津波と原発事故との中で特に原発事故の情報が錯綜し、避難指示を出すのに大変ご苦労なされた様子が手に取るように書かれておりました。

「原発被災地福島」の現状を一人でも多くの人々に知って頂き、原発事故の真実を知り、絶望が希望へつながることを日々祈り続けたいと思います。

山口の皆様 有り難うございました。

カトリック桑折教会所属
傾聴ボランティアさくら
氏家重子